

## 活動報告

# 法学部FDワークショップ@神田三崎町キャンパス 2019(第2回) 報告書

白井 哲也\*, 横溝 えりか

日本大学法学部

## A Report of the 2nd FD workshop at Kanda-Misaki-cho Campus 2019

Tetsuya USUI, Erika YOKOMIZO

College of Law, Nihon University

This is a report on the 2nd FD workshop held at the College of Law in September 2019. FD Workshop @ Campus is a training program that is implemented by faithfully reproducing Nihon University's official FD workshop in each college or department. The main objective is to learn how to design effective classes. In this, second, workshop, some parts of the original program were customized in line with the actual needs of, and issues in, the College of Law. As a result, we found that participants' motivation increased due to the great opportunity to discuss problem solving methods in real subjects.

キーワード：FDワークショップ, 法学部, カスタム化

**Keywords:**

FD workshop, College of Law, Customization

### 1. 事前準備

#### (1) 組織体制の検討と確立

法学部では、昨年度の開催の第1回FDワークショップ@神田三崎町キャンパスに引き続き、第2回のワークショップ開催を年度計画に事前に盛り込み、準備を進めてきた。新年度(2019年度)開始後の5月30日のFD委員会において、ワークショップの企画と運営を担う「ワークショップ検討小委員会」を設置するとともに、ワークショップの開催日、スケジュールの検討ならびにタスクフォース候補者への依頼を承認した。

7月11日にワークショップ検討小委員会(委員長 横溝えりか教授)を開催した。ここで法学部における「FD関連行事の参加サイクル」を検討し、これを承認した(図1参照)。「FD関連行事の参加サイクル」とは、法学部教職員全員がFD関連行事へ滞りなく参加するための組織体制である。この導入は、新任教員のみならず、経験豊かな教員にも本学の教学戦略を理解いただく機会を提供することを目的としている。具体的には、カリキュラム改訂、シラバス作成、授業デザイン、成績評価などの一連の流れを全教職員が深く理解し、実践することを通じて、アウトカム(学修成果)を高める教育を開発していく組織体制を法学部全体で構築することを目指す。「FD関連行事の参加サイクル」は、教育の質保証に不可欠となるPDCAサイクルを、全教職員が実践するための組織的な基盤となる。

\*E-mail: usui.tetsuya@nihon-u.ac.jp

投稿：2020年1月20日

受理：2020年1月24日

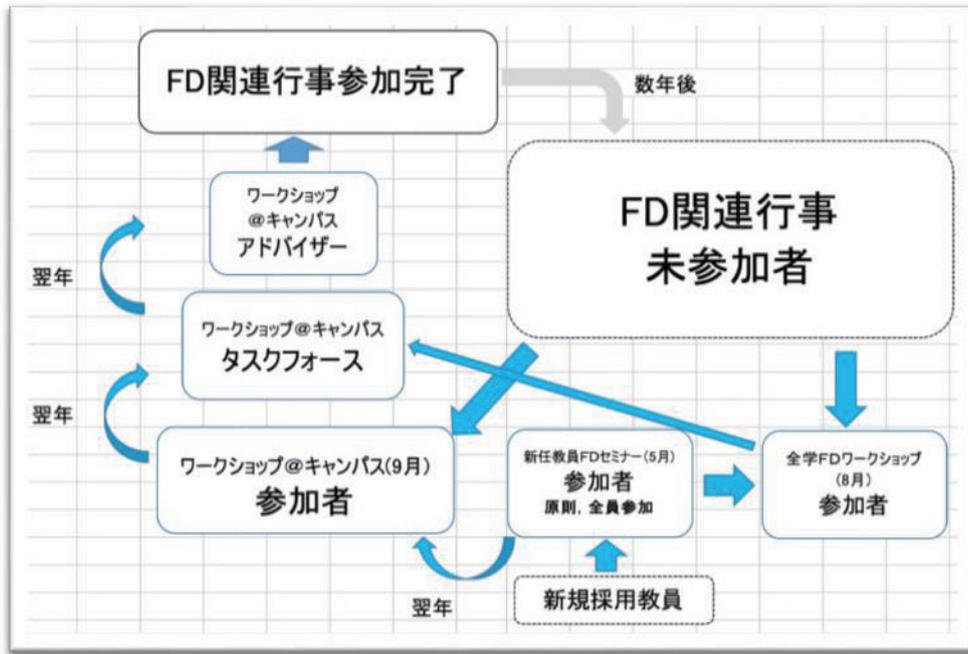


図1 法学部教職員の全員参加のための「FD関連行事参加サイクル」

サイクルの詳細は以下の通りである（図1参照）。第一に、FD関連行事への未参加者は全学FDワークショップ（8月開催）あるいはワークショップ@キャンパス（9月開催）のいずれかに参加する。新任教員はこれらに加えて、5月に開催の新任教員ワークショップにも参加する。ワークショップ@キャンパスへの参加者の中から、翌年のタスクフォースを選出する。タスクフォース経験者は、その知見を活かしてさらに翌々年のワークショップ@キャンパスの企画・運営においてアドバイザーを務める。これらすべてのFD関連行事への参加修了者に対しては、その後数年間、FD関連行事への参加を免除し、まだ参加の機会を得ていない教職員に優先的に参加の機会を提供する。本組織体制により、全教職員が公平にFD関連行事に順次参加するサイクルを構築でき、数年後には法学部所属の全教職員が日本大学教学戦略の全体像を理解し、授業デザインの一般的な方法の修得することを期待できる。

7月11日のワークショップ検討小委員会では、本参加サイクル導入の承認の後に、タスクフォースの確定、ワークショップのテーマの決定、タスクフォースの役割分担の決定、スケジュールの確認、動画・PPT・テキスト等の配布を行なった。小委員会にはタスクフォースも出席し、各自が全学FDワークショップの資料を読み込み、動画を視聴し、自身の担当箇所を事前に十分理解しておくことを確認した。今年度は本部FD推進センターからの直接の支援はなく、法学部FD委員会が自律して本ワークショップを企画・運営することも併せて確認した。

## (2) 法学部の事情に合わせたカスタム化

7月11日のワークショップ検討小委員会では、タスクフォースの打ち合わせも実施し、当日のワークショップの流れについて確認すると共に、ワークショップ内で扱うテーマの内容に関しても意見交換を行った。昨年実施の第1回では、全学FDワークショップの内容をほぼそのまま採用したが、今回のワークショップでは、議論の対象とする初年次教育を法学部が独自に実施している「自主創造の基礎2」とした。法学部では、すでに初年次前期に設定する科目である「自主創造の基礎1」については独自のテキストを編纂しており、学部全体で統一的な内容を実施に取り組んでいる。一方で、初年次後期に設置されている「自主創造の基

## GIO（一般目標）

国民の一員として責任を持って社会へ参画するために、選挙の歴史としくみ、18歳選挙権の論点とその目的を理解し、説得的なレポートを作成する。

## SBOs（個別行動目標）

1. 図書館等を使って関連する情報を収集できる。
2. 収集した情報をわかりやすく整理できる。
3. 選挙の歴史、しくみ、18歳選挙権の目的が説明できる。
4. 投票に至る過程において必要となる行動（十分な情報収集や他者との意見交換など）とその効果を説明できる。
5. 18歳選挙権の是非につき自身の意見を述べることができる。



図2 法学部の「自主創造の基礎2」に対応した事例選択（カスタム化の内容）

礎2」の内容は概ね担当教員に任されている。昨年の第1回に参加者としてすでにワークショップ@キャンパスを経験しているタスクフォースからは、法学部の実態に即したテーマのカスタム化が望ましいという提案がなされた。具体的には、学修方略にて扱う「車椅子の実習（詳しくは本部全学FDワークショップ資料を参照）」の事例を、法学部の「自主創造の基礎2」で実際に扱うことを想定した事例への変更することが提案された。しかし、全学FDワークショップの内容を大幅に変更することは全学の教学戦略より乖離するという懸念から、カスタム化の範囲は必要最小限とすることが確認された。カスタム化においては、FD委員長の白井が叩き台を作成し、8月中旬にタスクフォースへ提案、その後全体で検討し、最終版として確定する手順を踏むことを7月11日の時点で確認した。

尚、本ワークショップにおいて、実際に使用したカスタム化事例を図2に示す。また、ワークショップ資料（パワーポイントファイル）の全体を通じて、用語の統一、色の調整・ページの統廃合等を行い、初見者に対する理解の容易性の追求を試みた。

### (3) 参加者

ワークショップの参加者は、FD委員会委員と各学科および領域から推薦された教員（新任教員を含む）14名、教員と協働し教育能力の開発を企画・運営する職員3名、合計17名である。参加者の推薦においては、前述の「参加サイクル」のルールに基づき、未参加者を優先することを各学科・領域の主任へ依頼した。この17名を3つのグループ（各グループは教員4～5名、職員1名）に分け、Aグループ、Bグループ、Cグループとした。

タスクフォースは、全学FDワークショップあるいは@キャンパスの受講経験のある4名が担当した。また、運営責任者としてFD委員長、アドバイザーとして昨年のタスクフォースの教員の1名が参加した。運営スタッフとして教務課から教務課長を含む3名が参加した。この結果、本ワークショップは総勢26名の体制での開催となった（当日1名の欠席があり、参加者は16名であった）。

#### (4) 当日の進行 (9月12日の1日で開催)

当日の進行スケジュールは、昨年同様、大学本部で2日間開催される全学FDワークショップのプログラムを1日間に短縮したものとした。午前10時開始、午後5時30分閉会である。ワークショップの進行表の詳細については「FDワークショップ@神田三崎町キャンパス2019—『『自主創造の基礎』を考える』—開催要項」を参照されたい。

当日の進行は、全学FDワークショップと同様に、KJ法→二次元展開法→学修目標→学修方略→学修評価の順に、まず法学部タスクフォースが各セッションの意義および作業内容を説明した。次いで、各グループに分かれて討議を行なったあと、その成果を持ち寄り、全体討議を行なった。ワークショップはスケジュールどおりに進行し、予定時刻に終了した。

## 2. テーマと目標

以下、本報告書内における用語やタームの説明に関しては、原則として全学FDワークショップの進行表ならびにパワーポイント資料に基づき、記述する。これはFDワークショップの参加経験のない読者にとって理解を助けるための工夫である。

### (1) テーマ

前述の通り、ワークショップ検討小委員会で検討した結果、昨年と同様、今回のワークショップのテーマを『『自主創造の基礎2』を考える』に決定した。法学部では、『自主創造の基礎1』については共通のシラバスが作成されているが、「自主創造の2」の授業内容は担当教員の裁量に多くの部分が委ねられている。そのため、各教員が自身の専門分野を生かした授業を行なっている場合が多い。テーマをこのように設定したのは、担当する教員へ統一的な指針を提供することにより、「自主創造の2」の学修効果を一層高めることができると期待するためである。また、大学本部が作成したマニュアルには、理系学部を対象にした記述が少なくないため、法学部の特性を踏まえたマニュアルの修正というねらいもある。

### (2) 目標

#### 1. 一般目標 (GIO)

法学部における『自主創造の基礎』を一から見直し、より良い科目(授業)とするために、学修方法や授業内容、成績評価基準などを検討する。

#### 2. 個別行動目標 (SBOs)

- ① 初年次教育の問題点を明らかにし、「自主創造の基礎2」のカリキュラムを日本大学教育憲章の3つのマインドと8つの能力を修得できるように作成する。
- ② 効果的な学修方法を実践できるようにする。
- ③ ニーズに的確な学修目標を設定できるようにする。
- ④ 適切な成績評価基準を立案できるようにする。
- ⑤ 教職員が協働してカリキュラム等を検討し、企画・運営できるようにする。

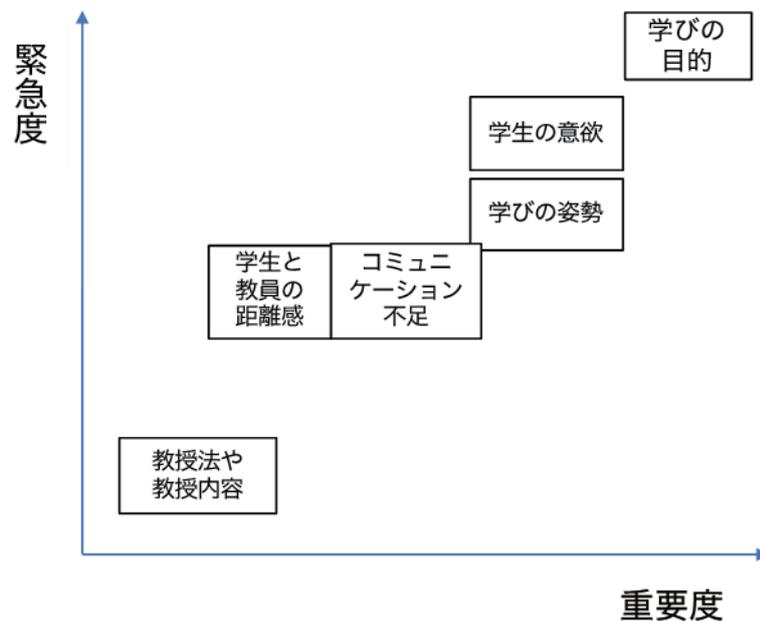
### 3. 初年次教育の問題点の抽出

#### (1) 問題点抽出の必要性と方法

初年次教育の問題点を抽出することにより、初年次教育の現状と改善すべき方向性が発現する。また「自主創造の基礎2」のカリキュラム作成時に考慮、改善すべき点を具体化することができる。問題点の抽出には、川喜田二郎氏が考案した「KJ法」を用いる。KJ法とは、小グループで思考や議論をカードに記入し、同趣旨のものをまとめることにより、問題点を抽出する方法である。問題点が明らかになれば、次に「二次元展開法」によって最優先解決課題を決定する。この方法では、X軸（重要度）とY軸（緊急度）に沿ってカードに記された問題点を並べるが、Z軸（難易度）を加える「三次元展開法」もある。

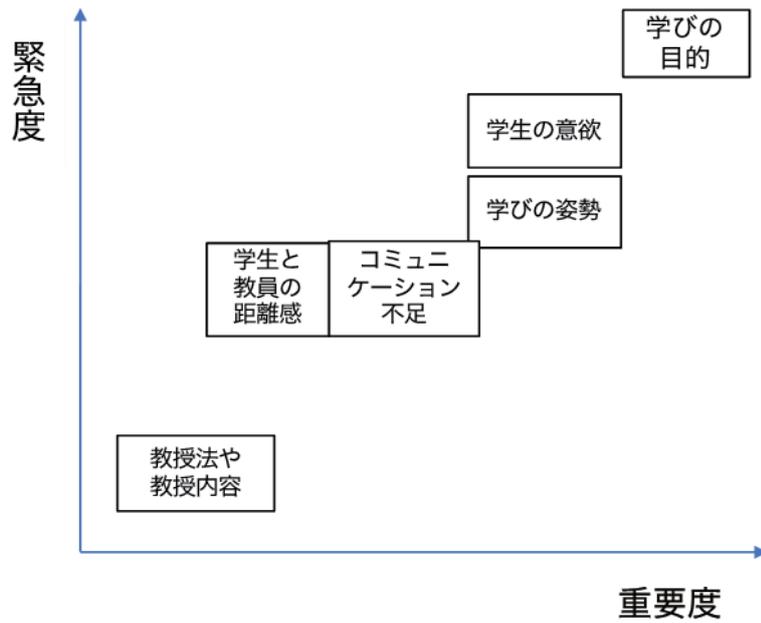
#### (2) 各グループにより抽出された問題点と二次元展開

各グループにおいて、これら抽出した問題点を「緊急性」と「重要性」の軸でプロットし整理した。各グループに共通した認識として、カリキュラム内容と学生の意欲向上が緊急かつ重要度の高い問題であることが判明した。これらの認識に基づき、学修目標の設定と学修方略（カリキュラム内容）の考案に移る。各グループのプロダクトを以下に示す。



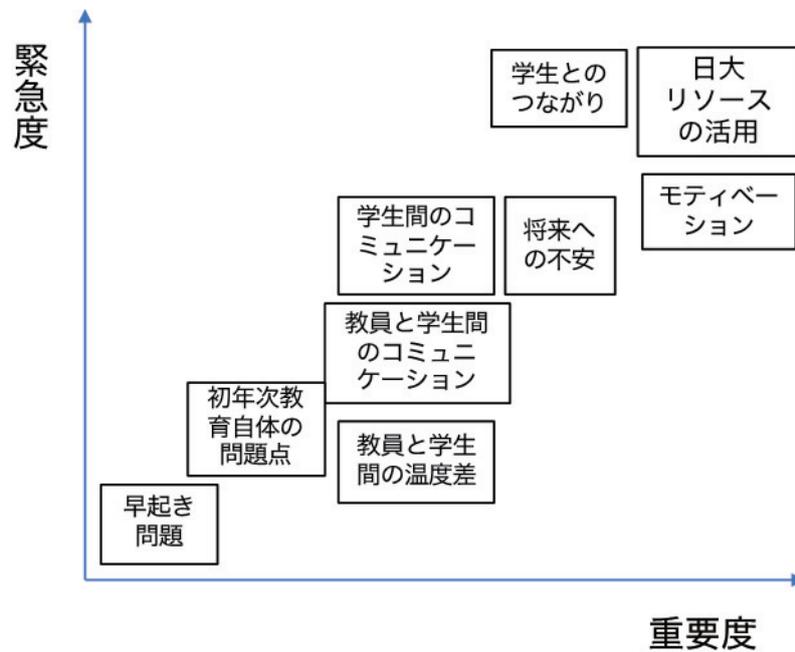
A グループ

教職員がワークで発掘した初年次教育の最重要問題「学びの目的」をよく見つけ、日本大学教育憲章の8つの能力の中で「問題発見」と「挑戦力」を教育する科目デザインを行う。



B グループ

教職員がワークで発掘した初年次教育の最重要問題「グループワークの問題点」をよく見つけ、日本大学教育憲章の8つの能力の中で「コミュニケーション力」と「リーダーシップ・協働力」を教育する科目デザインを行う。



C グループ

教職員がワークで発掘した初年次教育の最重要問題「日大リソースの活用」をよく見つけ、日本大学教育憲章の8つの能力の中で「リーダーシップ・協働力」と「コミュニケーション力」を教育する科目デザインを行う。

## 4. 学修目標

### (1) 学修目標 (Learning Objective) とは

#### 1. 目標設定の意義

- ① 目標が見えると、モチベーションを維持しやすい。
- ② 学生とその支援者との間で情報交換・共通の理解ができる。
- ③ 効率よく目標に到達するための学修方略の選択ができる。
- ④ 学修の評価に必要である。
- ⑤ 学修の不十分な部分を発見しやすい。
- ⑥ 他学部や他の教育機関との単位互換や第三者による評価の際などに必要である。

#### 2. 学修目標の構成

##### ① 一般目標 (General Instructional Objectives : GIO)

学修によって到達できる状態を包括的に表現したもの。学修の結果、「何のために、どのようなことができるようになっていくか」を包括的に記載したものである。

##### ② 個別行動目標 (Specific Behavioral Objectives : SBOs)

具体的な目標を達成するため、具体的・個別的に修得すべき項目を列挙したもの。一般目標を達成するためには、どのようなことができるようになればよいかを個別的に観察可能な具体的動詞で記載したものである。

#### 3. 個別行動目標の要件

- ① 学修目標は現実的であること
- ② 学修目標は理解可能であること
- ③ 学修目標は測定可能であること
- ④ 学修目標は達成可能であること

### (2) グループ討議で提示された学修目標



グループ名 : A      セッション : 学修目標  
 コース :  
 ユニット : 自主創造の基礎 2

**一般目標 : 法を中心に動く社会に対応するために、T字型の知性を身に着ける。**

No.	行 動 目 標 (SBOs)	( 領 域 )
①	社会の仕組みを説明できる	知識
②	情報収集整理し、社会の動向を分析できる	技能
③	意見を発信することができる	態度
④	正しい知識と理解の必要性に気づくことができる	態度
⑤		
⑥		
⑦		

A グループ



グループ名：B                      セッション：学修目標  
 コース：  
 ユニット：自主創造の基礎2

一般目標：学生が将来社会において中核的な存在として活躍するために、他者とのコミュニケーション力とリーダーシップ力を身につける。

NO.	行動目標 (SBOs)	(領域)
①	グループにおいて他者の考えを引き出すことができる	(態度・知識)
②	入手した情報を適切に分類・分析することができる	(技能)
③	協働者の意見を活用できる	(技能・態度)
④	課題に関する情報を図書館等で収集することができる	(技能・知識)
⑤	協働者の意見をとりまとめ、グループとしての方向性を示すことができる	(技能・態度)
⑥	グループワークに不可欠な論理的思考力を身につける	(知識)
⑦	Yesを引き出す力(説得力)	(知識・技能)

B グループ



グループ名：C                      セッション：学修目標  
 コース：  
 ユニット：自主創造の基礎2

一般目標：日大マインドを実感し、あらゆる可能性に富んだ時代に自らの目標を設定するために、日本大学全体の情報・人的なネットワークを生かし、将来設計に関するプレゼンテーションをできるようにすることを目標とする。

NO.	行動目標 (SBOs)	(領域)
①	現役生・卒業生の情報を収集できる (技能)	
②	学部内・学部外の情報を収集できる (技能)	
③	収集した情報を整理できる (技能)	
④	不足している情報を自主的に判断できる。(知識・技能)	
⑤	同じ志を持った学生同士で協調して作業を行うことができる (態度)	
⑥	自分たちの将来設計について説明することができる (技能・態度)	
⑦		

C グループ

### (3) 全体討議

上記の通りである。詳細については討議を撮影した動画を参照。

## 5. 学修方略

### (1) 学修方略 (Learning Strategies : LS) とは

学修者が個別行動目標を達成するために必要な学修方法の選択と順次性を具体的に立案し、必要な人的資源・物的資源を選択し、予算を計上することをいう。「方略」とは、学修方法を練ることを意味する。

### (2) 学修方略の種類

#### 1. 受動的方法

講義、見学、映画・ビデオ放映、示説 (デモンストレーション)、セミナーなど

#### 2. 能動的方法

- ① 実習 (実務学修) : フィールドワーク (社会実習など)、シミュレーション教育、ロールプレイなど
- ② グループワーク : カンファランス、抄読会、スモールグループ討議 (SGD)、ディベート、ワークショップ、ケーススタディ (事例検討) など
- ③ 自習 : 課題学修、e-learning、教科書・学術雑誌・ビデオなどによる学修、レポート作成、自主研究など
- ④ OJT (on the job training) : 学外見学、オリエンテーションなど
- ⑤ 研究発表 : 勉強会、公演会、研究会での発表
- ⑥ アクティブ・ラーニング : 反転授業、PBL、ピア・インストラクション

#### 3. 学修定着率

どのように学べば3カ月後の学修定着率が高いかについては、講義5%、読書10%、視聴覚教材20%、レポート30%、討論50%、体験75%、教える90%という調査結果が存在する。

### (3) 学修方略選択のポイント

1. 学修目標がどの領域 (知識・技能・態度) に属するかにより、適した方法を選択する。
2. 学生、教員が慣れている方法を選択する。
3. 学生の学修意欲を刺激し、持続できる方法を工夫する。
4. 学修効果を最大限に上げる方法を選択する。
5. 学修効率を最大限に上げる方法を工夫する。
6. 反復学修や練習の機会を多くする。
7. それぞれの方法の利点・欠点を補うように組み合わせる。

### (4) 学修のための資源

#### 1. 人的資源

教員、TA、SA、上級生、事務職員、学外以外の専門家、学生自身など

#### 2. 物的資源

- ① 場所 : 教室、セミナールーム、実習室、会議室、図書館、食堂など
- ② 媒体 : スライド、OHC、PC (インターネット)、プロジェクター、プリント、書籍、DVD、CD など

#### 3. 予算

備品を新たに購入したり、設置したりする必要がある場合は、その予算を確保する。協力者 (外部講師) にも、予算の計上が必要な場合がある。

4. 時間

個別行動目標達成のために、必要な時間数を考慮する。

(5) グループ討議で提示された学修方略と資源



グループ名：A セッション：学修方略

コース：

ユニット：自主創造の基礎2

順序 (LS)6	行動目標 (SBOs)	種類	人的資源	時期	物的資源		時間	予算
					場所	媒体		
1	社会の仕組み (SBO1)	講義	教員×1	開始時	教室		1	0
2	情報収集・社会 の動向分析 (SBO2)	グループワー ク	教員×1 学生相互		教室 図書館		2	0
3	意見発信 (SBO3)	発表会 ・ディベート	教員×1 学生相互		教室		1	0
4	正しい知識と理 解の必要性 (SBO4)	振り返り ・小括	教員×1 学生相互		教室		1	0
5	以上を1ステージとして3セットを繰り返す							

A グループ



グループ名：B セッション：学修方略

コース：

ユニット：自主創造の基礎2

順序 (LS)6	行動目標 (SBOs)	種類	人的資源	時期	物的資源		時間	予算
					場所	媒体		
1	3	テーマ設定(G)	SA×3		講義室		1	
2	4	講義	SA×3		講義室		1	
3	2, 4	資料収集(G)	SA×3		図書館		1	
4	2	資料分析(G)	SA×3		ラーニングコモン ズ		1	
5	6, 7	講義	SA×3		講義室		1	
6	1,3,5,6,7	GD	SA×3		ラーニングコモン ズ	PC	2	
7	1,3,5,6,7	発表	SA×3		講義室	PC	1	
9	3	テーマ設定(G)	SA×3		講義室		1	
10	2,4	資料収集(G)	SA×3		図書館		1	
11	2,4	資料分析(G)	SA×3		ラーニングコモン ズ		1	
12	1,3,5,6,7	GD	SA×3		ラーニングコモン ズ	PC	2	
13	1,3,5,6,7	発表	SA×3		講義室	PC	1	
14	2,3,6	ポートフォリオ(個人)	SA×3		講義室		1	

B グループ



グループ名：C セッション：学修方略

コース：

ユニット：自主創造の基礎2

順序 (LS)6	行動目 標 (SBOs)	種類	人的資源	時期	物的資源		時間	予算
					場所	媒体		
1	1・2	講義・学内ツアー	教職員	開始時	学内		1	—
2	1・2	卒業生座談会	教職員・卒業生	LG2開始時	講堂		2	10万円
3	3	テーマ設定・グループ 作成	教職員・学生相互	LG2終了時	教室		3	—
4	5	中間プレゼン	教職員・学生(4年 生含む)相互	LG3終了時	教室		1	
5	5	GD(方向性の確認 と共有)	教職員・学生相互	LG4終了時	自習室	PC	5	
6	5・6	プレゼン	教職員・学生(4年 生含む)相互	LG4終了時	教室			
7		まとめ、振り返り					1	
8								
9								

C グループ

## (6) 全体討議

すべてのグループにおいて、能動的方法（グループワークやディベートなどのアクティブ・ラーニング）の学修効果に関して再確認し、参加者全員でその方法について議論した。とくに資料収集→グループでのディスカッションやプレゼンの準備→プレゼンないしはディベートのプロセスの有用性が確認された。また、教員のみならず学生が人的資源として学習方略に参画することの意義と効果についてもその有用性が確認された。個別行動目標との関連性に基づき、まさに自主創造の基礎にふさわしい学修方略が具体的に、多面的に検討された。（さらなる詳細については、討議を撮影した動画を参照）

## 6. 学修評価

### (1) 学修評価（Learning Evaluation）とは

教育活動を効果的に遂行するために必要な情報を収集したのちに、それを解析し、意思決定を行なう作業をいう。情報収集（測定）、測定結果の価値判断（解析）、意思決定（合否・フィードバック）の3段階からなる。「教育評価（Educational Evaluation）」ともいう。

### (2) 学修評価の原則

1. 目的：なぜ評価するのか（Why）  
⇒目的に応じて形成的評価，総括的評価を行なう
2. 対象：何を評価するのか（What）  
⇒学修成果，学修目標（知識，技能，態度・習慣）の達成度  
誰を評価するのか（Whom）

⇒学修者, 教員・指導者, 管理者

3. 測定者：誰が評価するのか (Who)

⇒教員・指導者 (自己, 同僚を含む), 学修者, 管理者, 評価の専門家など

4. 時期：いつ評価するのか (When)

⇒学修前 (プレテスト), 学修中 (中間テスト), 学修後 (ポストテスト), フォローアップ  
テスト

5. 方法：いかに評価するのか (How)

(3) 学修評価の方法

1. 論述試験：問題に対する比較的自由で広い解答を学修者自身の言葉で記述し, その思考過程に関する情報を得る試験である。
2. 口頭試験：問題についての知識 (想起), 理解力 (解釈) および思考力 (問題解決) を判定する試験である。
3. 客観試験：多岐選択問題などに代表される想起, 解釈, 問題解決の知識を評価する試験で, 採点者が異なっても同じ結果が出る。出題時に正解が決まっている。
4. シミュレーションテスト：実際の場면을シミュレートした状況を, 文章, モデル, コンピュータなどの資料によって示し, その問題を解決する能力を想定する試験である。
5. 実地試験：技能の習熟度や態度を測定する試験である。
6. 観察記録：技能や態度・習慣を測定する試験である。すなわち, ある期間, 教員などが学修者の技能, 態度・習慣を観察して逐次あるいは適宜, 記録して判定資料とする。
7. レポート：小論文から研究論文にいたるまで学修者個人による記述であり, 知識の領域の深いレベルを対象とする測定方法である。

(4) 形成的評価と総括的評価

1. 形成的評価

学修の目標に到達しているか, 到達していないとすると何をすればよいかを学修者が気づくように学修の過程で行なう評価で, 学修の形成過程の改善を目的とする。形成的評価は, その結果を学修者に適切にフィードバックすることにより, 学修者の学修意欲を高め, 学修者の学修方法の改善, 教員や指導者の教え方の改善に大きく寄与する。

2. 総括的評価

達成された学修成果の程度を把握するための評価で, 通常, コース (学科目) や全過程が終了した時期に, 合否や及落判定のために行なわれる。従来, わが国の教育で行なわれてきた試験の大部分はこれにあたるもので, 合否を決定するという意味で学修者のみならず教員や指導者にとっても大きな意味をもってきた。しかし, 教育の過程で形成的評価が行なわれず, 総合的評価のみで学修者を評価すると, 学修者が総括的評価の前日のみ勉強する, いわゆる「一夜漬け」が行なわれる場合がしばしば生じた。

3. 形成的評価と総括的評価の特徴

① 形成的評価

学修形成過程の改善を目的として行なわれる。実施時期は学修単位 (ユニット) の開始時, 途中, 終了時である。また, どこまで学んだか, 何をすればよいかを気づく助けとなり, 学修過程の問題点を見つけるのに役立つために, 学修者一人ひとりに詳細にフィードバックする。評価は勧告のみとし, 学修者の正式記録には含めない。

② 総括的評価

達成された学修成果の程度を把握するために行なわれる。実施時期はコース終了時、進級、卒業などの重大な決定を行なうときである。総括的評価により可否を決定し、学修者の正式な記録として保存する。

4. 形成的評価の重要性

総括的評価を適切に行なうということは、大学が社会に対して果たすべき重要な責任であり、義務である。一方、形成的評価は、学修者自身の行動に日々直接影響を与えるという意味できわめて重要な意味をもつ。わが国の教育はこれまで総括的評価を重視するあまり、形成的評価が軽視されがちであった。教員や指導者による形成的評価の内容が学修者の知識、技能、態度・習慣に大きな影響を与えうること、すなわち形成的評価が「人を創る」ということを考えると、形成的評価はもっと重視されてよいと考えられる。

(5) 評価方法に必要となる属性

1. 妥当性：用いる評価方法が測定対象となる能力・行動を測定しうる程度をいう。
2. 信頼性：同じ集団に同じ試験を何回行なっても同じ結果が得られる程度をいう。
3. 客観性：同じ領域の専門家の中で、問題の正解に関して意見が一致している度合いをいう。
4. 効率性：試験実施の簡単さ、採点の容易さ、すなわち、評価の時間的、経済的な実用性をいう。
5. 特異性：解答者がなぜその解答を選んだかという理由の程度をいう。理由の確実性が高い解答が得られる設問は、特異性が高い評価方法であり、形成的評価では大切なことである。
6. 透明性：評価の過程と基準が被評価者や他の評価者に公開されていることである。

(6) グループ討議で提示された学修評価方法



グループ名：A                      セッション：学修評価  
 コース：  
 ユニット：自主創造の基礎2

行動目標 (SBOs)	目的	対象領域	時期	方法	評価者
意見発信(SBO3)	形成的	態度	ディベート(LS3)終了時	審査員の評価内容について評価 レポートによる評価	教員
意見発信(SBO3)	形成的	態度	ディベート(LS3)終了時	賛否を採点し、スコアリングにより 優劣を評価	ピア評価 (学生相互)

A グループ



グループ名：B                      セッション：学修評価  
 コース：  
 ユニット：自主創造の基礎2

行動目標 (SBOs)	目的	対象領域	時期	方法	評価者
2	形成的	技能	LS4中	ディスカッション	SA、教員
2	総括的	技能	科目終了時	ポートフォリオ	教員
評定尺度(5段階評価)					
1. 関連する資料の網羅的収集					
2. 収集した資料の適切な取捨選択					
3. 自己の主張の論拠となる資料の選択					
4. 自己の主張に反する情報の選択					

B グループ



グループ名：C                      セッション：学修評価  
 コース：  
 ユニット：自主創造の基礎2

行動目標 (SBOs)	目的	対象領域	時期	方法	評価者
6	形成的	技能・態度	LS2、LS4終了時	リアクションペーパー	教員
6	総括的	技能・態度	LS5終了時	プレゼンテーション	教員
6	形成的	技能・態度	LS5終了時	グループ間の相互評価	学生相互

C グループ

(7) 全体討議

特筆すべきは、昨年同様に同級生、自己による評価の導入の有用性が提案されたことにある。全体討論においては、すでに「自主創造の基礎2」のなかで学生間のピア評価を導入している教員より、実践例が示された(図3参照)。今後、本ワークショップを通じて、法学部内でこのような実践例の共有が進むことが期待できる。

本セッションではグループワークの時間を十分に確保できず、すべての個別行動目標に対応した評価方法を議論できなかった。この点は来年の課題としたい。

**ディベート評価シート(グループ用)**

[ ] グループ 進行役: \_\_\_\_\_

・評価のポイント(評価はステージごとに行う)

個人の評価(←個人用評価シート)を踏まえて**グループ全体の評価**をまとめる

まとめた結果をもとに**賛否両派にポイント**を割り振る(1ステージにつき**15ポイント**を割り振る)。

ポイントの**割り振りの根拠**を明示する(最終弁論終了後に各ステージでどのような採点結果になったのか、**請評してもらいます**)

【立論ステージ】(割り振るポイントに○をすること。両派の合計点は必ず15点にすること)

賛成派	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
否定派	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
割り振りの根拠	↓ ↓ ↓ ↓															

【反論ステージ】(割り振るポイントに○をすること。両派の合計点は必ず15点にすること)

賛成派	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
否定派	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
割り振りの根拠	↓ ↓ ↓ ↓															

【最終弁論ステージ】(割り振るポイントに○をすること。両派の合計点は必ず15点にすること)

賛成派	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
否定派	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
割り振りの根拠	↓ ↓ ↓ ↓															

図3 ピア評価方法の実践例(担当教員自作の評価シートの共有)

## 7. PDCA サイクルの構築を目指して

### (1) 参加者による総合評価

ワークショップ総合評価 ①				
1. 今回のワークショップにおける次の項目のうち、修得度はいかがでしたか。				
No.	項目	理解ができなかった	理解はできたが応用力は不十分	十分な応用力が得られた
1	教育の原理・あり方	0	12	4
2	カリキュラム立案の手順	1	7	8
3	学修目標の立て方	0	9	7
4	学修方略の立て方	0	10	6
5	学修評価の立て方	1	8	7
6	FDの企画・運営	2	9	5

図4 ワークショップ総合評価①

ワークショップ総合評価 ②						
2. 今回のワークショップを全般的に評価してください。						
No.	項目	価値なし	やや価値あり	かなり価値あり	極めて価値あり	
1	内容の価値について	1	0	7	8	
No.	項目	多すぎ	やや多い	ほぼ適当	やや少ない	少なすぎ
2	内容に対する時間量について	1	6	7	2	0
No.	項目	極めて難しい	やや難しい	ほぼ適当	やや易しい	易しすぎ
3	内容の難易度について	1	2	13	0	0
No.	項目	取り入れない	少し取り入れてみたい	取り入れてみたい		
4	このような教育的技法を、今後取り入れてみようと思うか	0	5	11		
No.	項目	必要ない	どちらでもよい	ぜひ必要		
5	この規模のワークショップを持続することについて	0	1	15		

図5 ワークショップ総合評価②

## (2) 総括と今後の課題

第2回を迎えたFDワークショップでは、前回に増して様々な具体的な提案がなされるとともに、学修目標、学修方略、学修評価に関する一連の授業デザインの方法論について参加者が修得する機会となった。総合評価の結果においても、本ワークショップは学びの場として参加者より高い満足が獲得できたものと判断できる。法学部内でFD活動の一層の活発化を推進していきたい。

一方、課題も浮き彫りとなった。図4にあるように今後の応用力に課題がある。とくに学修評価の方法について十分に議論し、吟味を重ねる時間を確保することができなかった。そもそも1日のワークショップとしてはややコンテンツが多く、参加者間で消化不良を引き起こしている可能性が考えられる(図5の第2問を参照)。全学FDワークショップのねらいを尊重しつつも、法学部の特殊性にも鑑み、来年のワークショップでは企画や当日の運営にさらなる工夫を加え、効率化を図りたい。また、日々の教育活動において本ワークショップで得た知識と技能を生かすための組織的な仕組み(たとえば、シラバスチェックなど)を構築し、「応用力」の育成機会を構築していきたい。